ても、自分の考えを話したり、相手の表情を見て意図的に話題を変えようとしたりする姿が見られるようになった。

〇コミュニケーションの中で自然とチャット機能を使用したり、画面越しに簡単な手話やジェスチャーを交えたりして、相手に伝えようとする姿が多く見られた。

（2）オンライン研究協議会における、参観者の主な感想等（オンライン公開研究授業後に実施）

〇ICT機器の機能が児童の1つの選択肢になっていた。学校教育の中で何度もこうした場面が設けられることで、将来の様々な場面でICT機器が自分の選択肢になり、自分の行動の選択肢を増やすことにつながるのではないか。

〇自宅に居ながら通級による指導が受けられることを実証する非常に貴重な実践である。

〇音声トラブルに対しては黒板で確認を行い、児童の聞こえや発言に対してはチャット機能で確認を行っていた。Web会議システムによる機能を効果的に活用していた。

〇オンラインを活用した授業をする際には、ICT支援員などに常駐してもらえると安心して活動することができる。

5 まとめ

（聴覚障害のある児童への、オンラインを活用した自立活動の効果的な指導の在り方について）

（1）成果

ア「自立につながる学びやすい環境」に関すること

〇対面による指導とオンラインを活用した指導を組み合わせるハイブリッド型の指導を継続して行うことができ、在籍校での補聴状況や学校での支援について早期に状況を把握し、指導支援することができた。

〇オンラインを活用した学習において、「発表する」「発表を聞く」等、役割を明確にして活動することにより、人とのやりとりが円滑になる体験を積むことができた。

イ「学びの姿」に関すること

〇ペア学習を重ねられたことで、当初は相手の意見に同意することが多かった児童が、次第に自分から考えを話せるようになってきた。また、自分から声をかけて話を進めたり、相手の表情を見て意図的に別の話題に話を変えたりしようとする姿が見られた。

〇画面越しに相手が困っている様子を感じ取ったときなどは代弁するなど手助けする姿も見られた。

〇学校生活や行事での聞こえにくさや、自分が行った「きこえの授業」の内容等について話し合い、同じ聞こえにくさのある人の多様な考えに触れることができた。

（2）課題

〇オンラインによる学習は、聞き取りの面で対面以上に難しい児童生徒がいる。聞こえ方を十分確認してから実施する必要があり、特にグループ学習では、参加人数が増えることで、オンラインでの聞き取りが難しくなった例もあった。それぞれが自分に合った情報保障を選択できるようにしたいが、担当教師では全てを担いきれない。話し合いのルールを共有したり、人手を介さないで情報を自力獲得できる力を身に付けたりする必要がある。

〇在籍校とのオンラインを活用した通級による指導の実施について、他校通級においても、自校通級と同様の、さらなる連携を進めていくことが大切である。

（2）通級による指導（指導事例4　言語障害）

1　児童について

学年	小・低学年（A児童）
障害の種類・程度や状態等	A児童 ・言語障害　置き換え （サ・ス・ソ音→シャ・シュ・ショ音、ザ・ズ・ゾ音→ジャ・ジュ・ジョ音、ツ音→チュ音等） ＊一貫性は見られないがキ→チになったり、ポケット→ポチェットになったりする。

※児童の実態は、別紙「自立活動目標設定シート」（参照：本冊子P20）のとおり（略）

2　単元について

（1）単元名「ザ行音を正しく発音しよう（置き換え）」

（2）単元の目標　＜区分＞

〇スモールステップで成功体験を積ませることで自信をもたせ、最後まで集中して課題に取り組むことができる。＜2（3）＞

〇相手の話をよく聞くことや話す内容を理解することができる。＜3（2）＞

〇ザ行音を正しく発音することができる。＜6（2）（5）＞

（3）単元の指導計画

①　対面による指導とオンラインを活用した指導を組み合わせた指導について

〇教材を舌の上に置くなどして構音点を確認し、舌の動きや口の形のよい状態を、児童自身が実感できるような学習は、対面による指導で行う。

〇発音練習や定着のための指導は、オンラインを活用した指導で行う。対面による指導ができない場合でも継続して行うことができるので、早期の課題改善につながりやすい。

②　対面による指導とオンラインを活用した指導を組み合わせた指導計画（11 時間扱い）

時	主な学習内容と活動	指導形態等
1	・サ行音を短文で正しく発音できるようにする。 ・ズ音を単語の中で正しく発音できるようにする。	オンラインを活用した指導 （Web 会議システム） 個別指導
2	・サ行音を短文で正しく発音できるようにする。 ・ズ音を単語や短文の中で正しく発音できるようにする。	オンラインを活用した指導 （Web 会議システム） 個別指導
3	・ズ音を単語や短文の中で正しく発音できるようにする。	オンラインを活用した指導 （Web 会議システム） 個別指導
4	・ザ音を単音や無意味音、単語で正しく発音できるようにする。	対面による指導 個別指導

5 本時	・ザ音を単語や短文の中で正しく発音できるようにする。	オンラインを活用した指導 （Web 会議システム） 個別指導
6	・ザ音を単語や短文の中で正しく発音できるようにする。	対面による指導 個別指導
7・8	・ゼ音を無意味音や単語の中で正しく発音できるようにする。	オンラインを活用した指導 （Web 会議システム） 個別指導
9・10	・ゼ音を短文の中で正しく発音できるようにする。	オンラインを活用した指導 （Web 会議システム） 個別指導
11	・ザ行音を短文の中で正しく発音できるようにする。	対面による指導 個別指導

3 本時の指導（5/11 時間）について

指導事例の概要	他校通級児童が、在籍校に居ながら、発音の定着を図る活動を通して、困難を改善・克服する意欲を高めることができた事例。 （口腔器官をスムーズに動かす力を高め、正しい発音方法の定着を図る指導）
指導方法・（場所）	オンラインを活用した指導 （A児の在籍校⇔本校の言語障害通級指導教室）
指導形態	他校通級　個別指導

（1）目標

〇ザ音を正しく発音することができる。＜6（2）＞

〇自分の発音に気付くことができる。＜2（3）＞

（2）オンラインを活用した指導のねらい

〇マスクをとり口形が確認でき、会話明瞭度を高めるような効果が期待できるためオンラインによる指導を行う。

〇一音一音丁寧に伝えることが意識してできるようにする。

（3）展開（50分）

時配等	主な学習内容と活動	ICT活用上の留意点等	教材教具・資料（ICT機器等）
導入（3分）	・日常会話をする。 ・口の体操をする。 「あいうえあおい」	・学習のはじめに、タブレット型端末にウェブカメラを装着し、画面の見やすさと、スピーカーの聞き取りやすさを確認する。 ・本時の流れを書いたホワイトボードを提示し、見通しをもって学習できるようにする。 ・A児の興味・関心のある話題をカードにして提示し、自由に会話をしながら、本児の学習意欲を高めるようにする。	タブレット型端末 ウェブカメラ ホワイトボード 口の体操カード 絵カード
展開（42分）	・学習課題をつかむ。 ザ音を正しく発音しよう ・単音や無意味音節の中で正しく発音する。 ・単語や短文の練習をする。	・タブレット型端末の発表者モードを使用し、単音や無意味音節の練習を児童が興味をもって取り組めるようにする。 ・イヤホンを使って音声を鮮明に聞き取ることにより、評価が適切にできるようにする。 ・回数を視覚化したカードを活用し、単語を同じ回数で繰り返すことで練習のリズムを整える。 ・見て分かるように文字カードや絵カードを利用しながら進める。	タブレット型端末 双六 対戦表 カードゲーム 構音ドリルカード イヤホン 絵カード
まとめ（5分）	・本時について振り返る。	・本時の流れを書いたホワイトボードを提示し、活動を思い出しながら振り返ることができるようにする。	ホワイトボード

4 指導後の振り返りについて

（1） オンラインを活用した指導のねらいと、児童の変容

〇コロナ禍でもマスクを外してお互いの口の動きを観察し合いながら練習を進めることができた。

〇児童は文章を読むことに不慣れで読みの流暢性にやや欠ける面があり、文章だけでなくイラストを添え適量な課題となるよう配慮した。単語練習では回数を視覚で確認できるよう工夫した。担当教師は手本としてゆっくりと話すように心掛けた。集中力や持続力が続くように教材を工夫した。

〇遠隔のため担当教師の指示が多くなり、児童の活動を止めてしまうことが多々あったので、児童の反応や発音に集中するよう考慮した。

〇オンラインを活用した指導を開始した頃は、機器の取り扱いや雰囲気に慣れず緊張感が目立ったが、接続のトラブルがあっても支障なく学習を進められるようになった。

（2） オンライン研究協議会における、参観者の主な感想等（オンライン公開研究授業後に実施）

〇オンラインでも対面のような関係性を保ちつつ集中力・主体性もみられ、授業が工夫されていることが分かった。

〇担当教師のタイミングのよい声掛けや評価がとても良かった。ことばだけでなく、動作も加えて褒めたことで、担当教師の思いがより児童に伝わったと感じる。
〇教材が視覚と聴覚を活用できるように工夫されていて分かりやすかった。
〇短文の練習では、児童は担当教師が先に読むと比較的誤りが少なかったので、段階によって範読は大切だと感じた。

5 まとめ

（言語障害のある児童への、オンラインを活用した自立活動の効果的な指導の在り方について）

（1）成果

ア「自立につながる学びやすい環境」に関すること
〇オンラインを活用した指導は、コロナ禍等対面による指導ができない場合でも、マスクを外して舌のトレーニングや口の体操を行う等、学習環境を継続してつくることにつながり、発音の定着に効果的であった。
〇長期休業中に指導の継続を図ることで、 課題改善に向けて家庭での児童の意識を高めることができた。
〇オンラインを活用した指導に適した教材・教具を工夫するとともに、画面に提示する情報量を考慮することにより、集中してリズムよく練習することができた。
〇オンラインを活用した指導は、画面上の担当教師と対話するという状況であるため、相手に伝える意識が必然的に生まれ、集中してやりとりを楽しむことができた。
〇他校通級児童が、オンラインを活用して学習することにより、保護者の送迎の負担軽減にもつながった。
イ「学びの姿」に関すること
〇相手に伝わるように一音一音丁寧に発音している姿が見られた。
〇映像を見ながら、「口の形ができている」と、自分の発音の仕方を振り返る場面が見られた。
〇オンラインを活用した指導を開始した頃は、機器の取り扱いや雰囲気に慣れず緊張感が目立ったが、接続のトラブルがあっても支障なく学習が進められるようになった。

（2）課題

〇音作りの段階では、児童は正しい舌の形や動きを獲得するために、試行錯誤を繰り返す。舌圧子を使って直接舌に触れたり、体の緊張をほぐしたりするためには対面による指導が効果的であると感じた。
〇発音の定着にはオンラインを活用した指導も有効であった。今後は対面による指導とオンラインを活用した指導の双方の良さを取り入れたハイブリッド型の指導が望ましいのではないかと考える。

（2）通級による指導（指導事例5　注意欠陥多動性障害）

1　児童について

学年	小・高学年（A児童）、小・高学年（B児童）
障害の種類・程度や状態等	A児童（本校） ・ADHDの診断　こだわりなどの特徴もある。 ・順序立てて説明することが苦手で、緊張すると吃音が多くなる。 ・困ったときには質問ができず、事が大きくなってから「どうしよう」と泣き出すことがある。 B児童（他市の小学校） ・通常の学級では友達との言葉のやりとりに消極的。 ・ICT機器への興味がある。家で友達とオンラインでゲームを行う際はリラックスして会話ができる。

※児童の実態は、別紙「自立活動目標設定シート」（参照：本冊子P20）のとおり（略）

2　単元について

（1）単元名「会話の達人になろう　～新しい友達との会話を楽しもう～」

（2）単元の目標　＜区分＞

〇他者の言葉を集中して聞く力や聞いたことを記憶する力を鍛える。＜3②＞

〇自分の気持ちや考えを話すことができ、「説明する」「お礼を言う」「質問する」ためのコミュニケーションに必要な力を身に付けることができる。＜6②＞

〇会話を楽しむために、自分の興味のあることや思いを一方的に話すのではなく、相手の状況を把握し、話す内容を考えて会話を続けることができる。＜6④＞

（3）単元の指導計画

①　対面による指導とオンラインを活用した指導を組み合わせた指導について

〇自立活動動画コンテンツを活用して、Web会議システムを行う際のマナー等を学習する場合や、自己紹介文を書く等作業を伴う学習の場合は、対面による指導を行う。

〇「聞く」「話す」等、役割を明確にし、初めての人ともスムーズな会話を楽しむという体験を積むために、オンラインを活用した指導（小集団の指導）を行う。

②　対面による指導とオンラインを活用した指導を組み合わせた指導計画（7時間扱い）

時	主な学習内容と活動	指導形態等
1	・集中力・記憶力ゲーム。「何番目の物は？」 ・自立活動コンテンツ動画を活用した指導。「会話のマナー」 ・自己紹介文を作ろう。	対面による指導 個別指導
2	・集中力・記憶力ゲーム「何番目の物は？」 ・自立活動　「想定外が起きたときの対処法を考えよう」 ・できごとを視覚的なイラストなどで整理しよう。	対面による指導 個別指導
3	・集中力・記憶力ゲーム「何番目の物は？」「恐竜マンション」 ・自立活動コンテンツ動画を活用した指導。「相手に分かりや	対面による指導 個別指導

	すく伝えよう 4W1H」 ・担当教員と会話のキャッチボールゲームをする。	
4 本時	・聞き方と話し方のポイントを確認する。 ・自己紹介をしよう。 ・友達とゲームをしよう。「恐竜マンション」	オンラインを活用した指導 （Web 会議システム） 小集団の指導（ペア学習）
5	・集中力・記憶力ゲーム「恐竜マンション」「分かりやすく伝えよう」 ・話の順序を考えて、会話シートを並び変える。 ・担当教員と会話のキャッチボールゲームをする。	対面による指導 個別指導
6	・聞き方と話し方のポイントを確認する。 ・学校紹介をしよう。 ・友達とゲームをしよう。「恐竜マンション」「間違い探し」	オンラインを活用した指導 小集団の指導（ペア学習） （Web 会議システム）
7	・ペア学習の様子を録画から振り返る。	対面による指導 個別指導

3 本時の指導（4/7時間）について

指導事例の概要	移動時間や空間の制限を超えて、他市の小学校の児童と双方向に交流する活動を通して、初めての人ともスムーズな会話を楽しむという体験ができた事例。 （オンラインを活用したペア学習で、新たな相手と会話やゲームを楽しみながら、言葉によるコミュニケーションの力を高める指導） A児童（本校） ・情緒の安定、言葉によるコミュニケーションと他者理解の指導。 B児童（他市の小学校） ・オンラインを活用して積極的に会話などのコミュニケーションを行う指導。
指導方法・（場所）	オンラインを活用した指導 （本校の LD・ADHD 等通級指導教室⇔他市小学校の LD・ADHD 等通級指導教室）
指導形態	小集団の指導（ペア）

（1） 目標

〇初めての相手に緊張せずに自分の気持ちや考えを話すことができる。＜6②＞

〇ゲームでは「説明する」「お礼を言う」「質問する」ために必要なコミュニケーションの仕方を身に付けることができる。＜6②＞

（2） オンラインを活用した指導のねらい

〇興味があるオンラインを活用し、緊張せずに新しい友達と会話を楽しむことができる。

〇タブレット PC の画面に視点をしぼることで、相手を見て様子を伺いながら、会話することができる。

（3）展開（45分）

時配等	主な学習内容と活動	ICT活用上の留意点等	教材教具・資料（ICT 機器等）
導入（5分）	・『今日の学習』から本時のめあてを確認する。 会話の達人になろう。「新しい友達と会話を楽しもう」	・自己紹介文を練習し、はっきり音声が伝わるようにする。 ・視点や相手の様子が分かるようにパソコンの画面を調整する。	ワークシート 録画用タブレットPC 自己紹介文
展開（35分）	・自己紹介を交代で行い、質問したり、答えたりする。 ・ゲーム「恐竜マンション」を行う。 ・指示書を読んで説明したり、教えてもらったときはお礼を言ったりする。 ・悩んだときには質問する。	・音声の聞き取りにくさや聞き逃した場合は、質問できるように、一度止める。 ・A児の発音が明確でない場合にはゆっくり話すことを伝える。 ・画面からの相手の様子を伺いながら、会話するように支援する。 ・指示書カードを読む際には、手元を画面に映さずに、言葉による説明を重視する。 ・答えは最後に確認し、クリアできた喜びを味わえるようにする。	児童用タブレットPC ゲーム用具
まとめ（5分）	・今日のめあての反省や、相手の児童の分かったことを記録して、振り返りを行う。	・ICT機器を活用して、自分の言葉で分かりやすく説明できたか、友達の話を様子を伺いながら聞くことができたか確認する。	

4 指導後の振り返りについて

（1）オンラインを活用した指導のねらいと、児童の変容

〇新たな友達ができたことを喜び、一つの画面に集中したことで、相手の様子を見ながら話したり、相手の話を集中して聞いたりすることができた。

〇Web会議システムでのやりとりに適したゲームを教材にしたことで、「説明する」「質問する」などを取り入れて会話を楽しむことができた。

〇ペア学習で学んだことを、通常の学級の友達と対面でもできるようにつなげていきたい。

（2）オンライン研究協議会における、参観者の主な感想等（オンライン公開研究授業後に実施）

〇児童の興味があるオンラインを活用したことで、緊張せずに自信をもって会話ができた。他市の小学校の児童と交流することで、「友達を増やしたい。」「もっと自分のことを知ってほしい。」という気持ちが芽生えた。

〇Web会議システムを活用したやりとりは、児童の障害の特性から、1対1で相手が分かりやすい上に、画面に視点を集中することができ、学びやすい環境と言えるのではないか。

〇吃音がある児童に対して担当教師がさりげなく配慮していた。隣りに教師が座って声を掛けるのは児童にとって安心感がもてる反面、児童が画面の相手に集中しているときに声を掛けるとよそ見をさせてしまうので、担当教師の位置や声を掛けるタイミングなど、関わり方を検討する必要がある。
〇PCの集音機能が弱く、高性能な集音器があるとよかった。
〇録画視聴による研究授業では、県発達障害者支援センターの先生に授業の様子を見てもらい、後日、指導・助言を得ることができた。パワーポイントに動画を入れて共有し、児童の個人情報の流出に配慮した。

5 まとめ

（注意欠陥多動性障害のある児童への、オンラインを活用した自立活動の効果的な指導の在り方について）

（1）成果

ア「自立につながる学びやすい環境」に関すること
〇オンラインを活用した指導は、注意機能に特性がある児童や対面に不安や緊張感を感じる児童にとって、画面に注目でき、不安が軽減する学習環境となり、相手の様子を伺いながら集中して活動することができた。
〇オンラインを活用した学習に適したゲームを教材として活用することにより、リラックスして会話や質問などを行い、楽しく活動することができた。
〇オンラインを活用することにより、自立活動の指導のねらいや、障害の状況等に応じて、通常の学級・他校や他市の通級指導教室とつながることができ、学習者のマッチングが可能となり、ペア学習を効果的に行うことができた。
イ「学びの姿」に関すること
〇ペア学習をする中で、「大丈夫です。」など、相手の動きを待つ適切な言葉かけができるようになった。
〇「次回の学校紹介をお楽しみに・・・。」など楽しみにし、A児は、学校の写真を撮り、文を書いて、読む練習を意欲的に行った。
〇在籍学級での教科学習において、他の児童の話を聞いて一呼吸おいてから反応できることが増えてきた。

（2）課題

〇児童から、「PCの画像を映すときには、正面からが良い。」「チャットなどの機能が多いと落ち着かない。」などの声があった。個々の障害の特性を理解し、ICT機器を利活用することが大切である。
〇オンラインを活用した学習で身に付けたコミュニケーションの力や人間関係の形成に関する力が、通常の学級等においても成果として表れているか、在籍学級担任等と連携してきめ細かく観察したり、支援したりしていく必要がある。

（3）通常の学級（指導事例6　小学校・理科一斉授業）

1　児童について

学年	小・高学年（A児童）
障害の種類・程度や状態等	・視覚障害 ・強度近視、眼球振とうがある。 ・単眼鏡やルーペ等の視覚補助具は、積極的に活用できる。 ・学校生活で見えにくい場面があっても、周りの雰囲気に合わせて行動することが多い。そのため、「見やすい方法で活動・学習したい」と訴える場面は少なく、自分なりの方法で対処していることが多い。

※児童の実態は、別紙「自立活動目標設定シート」（参照：本冊子 P20）のとおり（略）

2　単元について

（1）単元名　理科「水溶液の性質とはたらき」

（2）参考となる主な自立活動の内容
　2　心理的な安定
　（3）障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること
　4　環境の把握
　（1）保有する感覚の活用に関すること
　（3）感覚の補助及び代行手段の活用に関すること

（3）単元の目標
〇水溶液の性質や働きについての理解を図り、実験・観察に関する技能を身に付けることができるようにする。（知識及び技能）
〇水溶液の性質や働きについて見いだした問題について、予想や仮説をもとに、解決の方法を発想し、表現するなどして、問題解決できるようにする。（思考力・判断力・表現力等）
〇水溶液の性質や働きについての事物・現象に進んで関わり、粘り強く、他者と関わりながら問題解決しようとする。（学びに向かう力・人間性等）

（4）学びの過程において考えられる困難さへの対応について
〇実験の見通しがもてず、順番を待つことや学習活動に参加することが困難とならないよう、グループ内での役割を明確に示して実験を進められるようにする。　【ユニバーサルデザインの観点】
〇見えにくさがあり、線香の火がついているか確認するのが難しい場合には、ミニ衝立を用意し、見えやすい色の背景で確認できるようにする。　【自立活動の観点】
〇試験管にピペットが入っているか確認する際は、ピペットを優しく揺らして確認するよう、促す配慮をする。　【自立活動の観点】
〇近づいて見ることが難しい場面では、タブレット型端末等の補助具の活用を促す配慮をする。　【自立活動の観点】

（5）自立活動の観点から見たA児童の目指す姿

〇オンラインを活用した通級による指導において身に付けた実験方法を活用して、自分の力で線香の火を確認したり、蒸発皿の残留物の確認をしたりすることができる。＜4(1)(3)＞

・「ピペットで試験管から蒸発皿へ水溶液を移す場面」と、「蒸発皿の残留物について調べる場面」は、見えにくさが想定される。

（6）単元の指導計画（16時間扱い）

時	主な学習内容と活動	指導形態等
1	・水溶液の違いについて、問題を見いだし、それらを調べるための実験方法を考える。	一斉指導
2	・5種類の水溶液について、何が溶けているかを調べる。	一斉指導
3 本時	・液中の水を蒸発させた結果をもとに、溶けているものについて考察する。	一斉指導
4	・炭酸水に溶けているものは何か、調べる。	一斉指導
5	・二酸化炭素は水に溶けるか調べる。	一斉指導
6	・水溶液には気体が溶けているものがあることをまとめる。	一斉指導
7	・リトマス紙を使って、水溶液の性質を調べる。	一斉指導
8	・リトマス紙の色の変化によって、水溶液は、酸性・中性・アルカリ性に分けられることを知る。	一斉指導
9	・酸性の水溶液が、金属を変化させるか予想し、金属に塩酸や炭酸水を注いだときの変化について調べる。	一斉指導
10	・金属に塩酸や炭酸水を注いだときの変化についてまとめる。	一斉指導
11	・塩酸に溶けた金属は、どうなったのか予想し、実験方法について考える。	一斉指導
12	・塩酸に金属が溶けた液を蒸発させ、溶けた金属を取り出す。	一斉指導
13	・金属が溶けた液から出てきた固体は、元の金属と同じ物なのか調べるための実験方法について考える。	一斉指導
14	・自分たちで考えた方法で、固体の性質を調べる。	一斉指導
15	・水溶液には金属を変化させる物があることをまとめる。	一斉指導
16	・水溶液の性質と働きについて、学習したことをまとめる。	一斉指導

3 本時の指導（3/16時間）について

指導事例の概要	オンラインを活用した通級による指導において身に付けた実験方法を活用して、在籍学級の理科の一斉授業において、自分にとって見やすい実験の方法を主体的に活用することにより、自信をもって実験に取り組み、正確な結果を得ることができた事例。（自分にとって見えやすい実験の方法を主体的に活用する力を高める指導）
指導方法・（場所）	通級による指導の効果が、理科の指導においても波及することを目指した対面による指導 （在籍校である本校の理科室）
指導形態	一斉指導

（1）目標

〇器具や水溶液を正しく安全に扱い、何が溶けているかを調べて、適切に記録することができる。（知識・理解）

〇実験結果をもとに考察し、液中の水を蒸発させて白い物が残った水溶液には、固体が溶けていることをまとめることができる。（思考・判断・表現）

（2）自立活動の観点から見たA児童の目指す姿

〇見えにくさが想定される、ピペットで試験管から蒸発皿へ水溶液を移す場面では、オンラインを活用した通級による指導の際に選択した見えやすい方法を活用して、自分の力で実験することができる。

〇見えにくさが想定される、蒸発皿の残留物について調べる場面では、タブレット型端末を用いて蒸発の様子を観察し、自分の力で確認できるようにする。

（3）展開(45分)

時配等	主な学習内容と活動	・指導、支援 ◇個別の支援・合理的配慮 ☆ICT活用上の留意点 ◎評価(評価の方法)	教材教具・資料 （ＩＣＴ機器等）
導入（10分）	・学習課題をつかむ。 水溶液に溶けているものについて考えよう。	・前時の学習をもとに、見た目やにおいの違いは、水に何が溶けているかによることを押さえ、学習課題をつかめるようにする。 ・黒板が見えにくい児童や、聴覚優位の児童にとって分かりやすいよう、教師が声に出しながら学習問題を板書する。	
展開（30分）	・水溶液を蒸発させて、残った物について調べ、記録する。 ・実験結果を基に、考察する。	・見通しがもてるように、全体で実験方法についての確認をする。 ・換気、机上の整理、保護めがねの着用など、安全上の注意を確認した上で実験を開始する。 ・どの水溶液を蒸発させたら残留物があったか確認し、正確に表にまとめられるようにする。 ・グループの中で誰がどの水溶液を蒸発皿に移すか役割を確認し、見通しをもって活動できるようにする。 ◇A児童が、試験管から蒸発皿へ水溶液を移すときには、ピペットを優しく揺らして、適量を吸い取ることができているか確認する。(観察) ◇A児童が、蒸発の様子を捉えにくい場合には、児童用タブレット型端末のカメラ機能を用いて蒸発中の様子を撮影し、見えやすくしているか確認する。(観察) ☆タブレット型端末で蒸発の様子を撮影する際には、安全性を考慮して、ガスコンロから離れた高い位置で撮影し、後から落ち着いて拡大して確認できるようにする。 ◎器具や水溶液を正しく安全に扱い、何が溶けているかを調べて、適切に結果を記録している。(知識・技能) ・残留物の有無によって、水溶液に溶けている物が気体か固体のいずれかを区別できるようにする。	水溶液 試験管 蒸発皿 ピペット ガスコンロ 金網 保護めがね 児童用タブレット型端末

		・各班で考察した後、全体で共有し、検討できるようにする。 ◎実験結果を基に考察し、液中の水を蒸発させて白い物が残った水溶液には、固体が溶けていること、残らなかった物には気体が溶けていることをまとめている。（思考・判断・表現）	
まとめ（5分）	・実験からわかったことをまとめる。	・食塩水と石灰水は、個体が溶けている水溶液であることをまとめる。	

4 指導後の振り返りについて

① 「自立活動の観点から見たA児童の目指す姿」についてと、児童の変容

〇オンラインを活用した通級による指導で、理科の実験で困難さが予想される内容について、事前に実際に使う実験器具を使って学習することができたため、感覚をつかみやすく、見通しをもって参加し、意欲の向上につながった。

〇A児が困難さを克服し、楽しそうに授業を受けていた。他の児童と変わらずに実験を進めていたので、自立活動や通級による指導の効果を感じることができた。

② 協議会における、参観者の主な感想等（公開研究授業後に実施）

〇オンラインを活用することで、在籍校に居ながら通級による指導の様子を、在籍学級担任が参観することができるため、支援が必要な場面を把握し、在籍学級で声掛けをするタイミングを図ることができた。また、在籍校の在籍学級担任以外の職員も参観することができるため、校内支援についての理解を深めることにもつながった。

〇タブレット型端末を用いることで、食塩水の溶け残りや、細かな粒の変化を拡大して見ることができ、見えやすくするという観点から考えると、大変効果的であった。

〇A児に対する支援が、学級の他の児童にとっても分かりやすいと感じ、他学級でも生かしていきたいと思った。

5 まとめ

（視覚障害のある児童への指導・支援の充実に係る、遠隔での連携の在り方について）

〇板書書写や、文章のルーペ読みの指導を、オンラインを活用して行ったが、画面上では見えにくさがあり、通常の学級での授業に生かしにくいという課題があった。理科の実験のように、オンラインによる指導が効果的な内容と、対面による指導が効果的な内容を精査して、年間指導計画を立てる必要がある。児童本人と対話し、ニーズを把握した上で行うことも大切である。

〇ICT機器の活用に関しては、他の児童にとっても有効な場合が多くある。他の児童はやっていないという理由で、通級による指導で身に付けた内容を通常の学級で生かせずに終わるということがないようにする。通級による指導で学んだことを、通常の学級でも生かしやすい環境を学校全体で考えていく必要がある。

（3） 通常の学級 （指導事例7　中学校・英語科一斉授業）

1　生徒について

学年	中・(A 生徒)
障害の種類・程度や状況等	・両側感音難聴 ・補聴器、デジタルワイヤレス補聴援助システム(ロジャーマイク)併用 ・周囲に、自身の「聞こえ」について伝えることに対しては、消極的。

※生徒の実態は、別紙「自立活動目標設定シート」(参照：本冊子 P20)のとおり （略）

1　単元について

（1） 単元名　　SUNSHINE ENGLISH　COURSE　1
Program　6「 The Way to School 」

（2） 参考となる主な自立活動の内容
　4　環境の把握
　(1)保有する感覚の活用
　(4)感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること

（3） 単元の目標
〇人称代名詞の目的格及び疑問詞 Why～？ と Because～. の答え方の働きを理解することができる。(知識及び技能)
〇ジャクソンの通学について理解し、本文の内容を読み取ることができる。(知識及び技能)
〇人称代名詞の目的格及び疑問詞 Why～?と Because～.の答え方を用いて「理由」を尋ねたり、それについて答えたりできるようにする。(思考力・判断力・表現力等)
〇人称代名詞の目的格及び疑問詞 Why～?と Because～. の答え方を用いて「理由」を尋ねたり、それについて答えたりしようとしている。(学びに向かう力・人間性等)

（4） 学びの過程において考えられる困難さへの対応について
〇指示や説明をする時は、一つ一つの言葉を聞き取りやすくするために、静かな状況をつくり、授業者に注目をさせてから行う。　【ユニバーサルデザインの観点】
〇英文の意味を理解しやすくするために、口頭による説明だけでなく、字幕や写真・絵などの視覚補助教材を活用する。また、ジェスチャーなど視覚支援を行う。　【ユニバーサルデザインの観点】
〇新出単語の導入時には、発音の仕方を確認するため、透明マスクを着用し、口元を見せながら発音練習を行う。　【ユニバーサルデザインの観点】
〇英語の授業を構造化し、生徒にとって次の活動や行動が予測しやすい環境を整える。
【ユニバーサルデザインの観点】
〇聞き取りにくさのある無声音や、モニターから流れる音声のリスニング活動時には、音声を聞き取りやすくするために、単元をとおして、補聴援助システム(ロジャーマイク)を活用するとよいことを伝えておく。　【自立活動の観点】

（5）自立活動の観点から見たＡ生徒の目指す姿

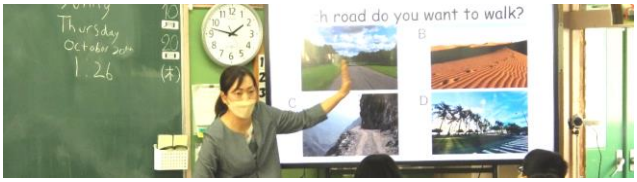
〇リスニング活動において、補聴援助システム（ロジャーマイク）を活用することで、モニターから流れるまとまった英語を正しく聞き取ることができる。

※オンラインを活用した連携における配慮・工夫

・通級による指導の内容をオンライン会議等で事前に共有し、授業の場面に役立てる。
・聞こえ方は個によって違うので、様々な機器の音質を確認する。
・補聴援助システム（ロジャーマイク）の切り替えの様子を観察し、必要に応じてアイコンタクトで確認する。
・生徒本人の意思や選択を尊重しながら、本人に合った方法を考える。

（6）単元の指導計画（6時間扱い）

時	主な学習内容と活動	指導形態
1 本時	・テーマに関する最初の聞き取り（リスニング活動） ・program6 のテーマ「通学路」について考える。（スモールトーク活動を含む） ・program6 の英単語練習　・Scene1で新出文法確認（人称代名詞の目的格） ・リスニング活動	一斉指導
2	・program6 の英単語練習　・前時の文法復習 ・人称代名詞の一覧表で発音練習 ・Think1（本文）の内容確認→QA→音読練習→大事な表現に下線引き	
3	・program6 の英単語練習 ・Scene2で新出文法確認　（疑問詞 why～？と Because の答え方） ・リスニング活動　・スモールトーク活動	
4	・program6 の英単語練習　・前時の文法復習 ・Think2（本文）の内容確認→QA→音読練習→大事な表現に下線引き	
5	・program6 の英単語テスト① ・本課で学習した文法を用いたアクティビティ　・「世界の果ての通学路」視聴	
6	・program6 の英単語テスト②　・既習文法を用いたライティング ・本課のまとめ	



3　本時の指導（1/6時間）について

指導事例の概要	通級による指導において身に付けた力を活用して、英語科の一斉授業において、補聴援助システム（ロジャーマイク）を主体的に活用することにより、モニターから流れるまとまった英語を正しく聞き取ることができた事例。
指導方法 （場所）	通級による指導の効果が、英語科の指導においても波及することを目指した対面による指導 （在籍校である本校の教室）
指導形態	一斉指導

（1） 目標
〇人称代名詞の目的格の働きを理解することができる。（知識及び技能）
〇program6 のテーマ「通学路」についての考えを聞いたり、答えたりできる。
（思考力・判断力・表現力等）
〇program6 のテーマ「通学路」についての考えを聞いたり、答えたりしようとしている。
（学びに向かう力、人間性等）

（2） 自立活動の観点から見た A 生徒の目指す姿
〇program6 の最初の聞き取りと Listen の活動において、補聴援助システム（ロジャーマイク）（以下「ロジャーマイク」）を活用することで、モニターから流れるまとまった英語を正しく聞き取ることができる。

（3） 展開（50分）

時配等	主な学習内容と活動	・指導、支援 ◇個別の支援・合理的配慮 ☆ICT活用の留意点 ◎評価（評価の方法）	教材教具・資料 （ICT機器等）
導入 （2分）	・英語で挨拶する。 （weather, day, date, timeの確認）	・補聴援助システムのマイクは、ALT が身につける。	
展開 （45 分）	・Program６のテーマに関する最初の聞き取りを行う。 ・学習課題をつかむ 目標①：program6 のテーマ「通学路」についての考えを英語で聞いたり答えたりしよう。 ・自分の通学路について全体で、英語でやり取りをする。 ・新出英単語の意味を確認し、ALTの後に続いて発音する。 目標②：人について「～を、～に」と言う時の言葉を理解しよう。 ・Scene１の動画を見る。	◇モニターからの聞き取りの場面で、A生徒が補聴援助システムへの接続をオンにしているか、アイコンタクトで確認をする。 ☆テレビの音量調整を行う。 ☆放送内容を確認するため、聞き取り活動後に、スクリプトを文字でモニターに（視覚）表示する。 ・他の生徒の発表内容は、教師が繰り返す。 ◎ロジャーマイクを活用し、正しく聞き取ることができる。（観察・発表） ・イメージをもって聞き取りやすくするため、 パワーポイントは文字と写真の説明を加える。 ◇スモールトーク時は、他の生徒の声が入り、ペアの相手の声が聞き取りにくいため、接続はオフにすることを理解しておく。 ◎「通学路」についての考えを聞いたり、答えたりしようとしている。（観察） ・聞き取りにくい無声音を含む発音練習の場面では、教師が透明マスクをつけ、口元を見せながら発音の確認をする。 ☆テレビの音量調整を行う。 ・板書プリントの新出表現にはあらかじめ印をつけ、線を引くところを示しておく。	テレビ パソコン 振り返りシート 英単語プリント 透明マスク 板書プリント

	・Listen の問題を聞き、答えを書く。	◇ロジャーマイクをオンにしているかアイコンタクトで確認する。 ◎人称代名詞の働きを理解し、ロジャーマイクを活用して、正しく聞き取ることができる。（観察・発表）	
まとめ（3分）	・学習のまとめを行い、振り返りシートに記入する。	◇A生徒が、モニターからの音声を聞き取る場面で、ロジャーマイクを自分から活用し、 まとまった英語を正しく聞き取ることができたか確認する。	振り返りシート

4 指導後の振り返りについて

① 「自立活動の観点から見たA生徒の目指す姿」についてと、生徒の変容

〇日頃、補聴援助システムの使用について「なくても大丈夫。」と話すことが多いA生徒が、英語の授業で、「こういう時はあったほうが聞き取りやすい。」などと詳しく話すようになった。「自分にとって必要なもの」「使ったら便利なもの」と実感し、意識の変容が見られた。生徒自身が「聞き取りやすさの違い」に気付き、考え、使用する機会が多くなった。

② オンライン協議会における、参観者の主な感想等（オンライン公開研究授業後に実施）

〇卒業後の進路や就労等を含め、将来にわたって生活に必要な力を育てるという自立活動の視点をもつことが有意義である。学校で終わらない機器の使い方を伝える必要がある。

〇A生徒が、よく学習に集中していた。本人が自分でも気が付いていなかった困難さに気付き、便利さを感じて必要な機器を使い続けられるようにすることが、指導のねらいとしてよく伝わってきた。

〇ユニバーサルデザインの授業としての丁寧さが、A生徒だけでなく、他の生徒全体にも分かりやすく意欲的に活動できる授業にしていた。授業後の1対1の声かけ（確認）も良かった。

5 まとめ

（聴覚障害のある生徒への指導・支援の充実に係る、遠隔での連携の在り方について）

（1） 成果

〇グループウェアを活用して在籍校と通級による指導の設置校を日常的につなぐことで、次のような成果が得られた。

・音声だけでなく、スクリプトや画像、ジェスチャーなどICTを活用した視覚的な情報を適切に取り入れるようになり、どの生徒にも分かりやすい、授業のUD化が進んだ。

・Web会議システム等の活用により、目的に応じた職員構成で、専門的な指導・助言を得ながら情報共有ができ、生徒にとって必要な対応をスピーディーかつ組織的に進めることができた。生徒や職員間の対話が増え、生徒への理解と支援が広がった。

（2） 課題

〇聞こえ方には個人差があり、一人一人実態が異なるため、丁寧な関わり、教育相談の積み重ねが必要である。（教育相談スキルの向上）

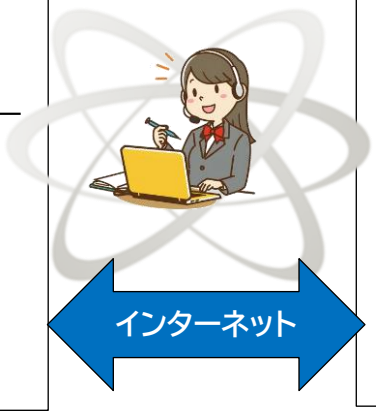
〇役割を明確にした組織的・計画的な校内体制が、遠隔でのやりとりを含めた連携の土台となると考える。（校内支援体制の整備）

MEMO

◆ 実施のポイントの Q&A や指導事例を参考にして、オンラインを活用した指導にチャレンジしてみましょう。

学校

〇PC 内蔵カメラ・マイク・スピーカー
〇ヘッドセット
〇オンラインツール
　など



児童生徒

〇一人1台端末（配付されたもの）
〇PC 内蔵カメラ・マイク・スピーカー
〇ヘッドセット
〇オンラインツール
〇自宅無線ルーター
〇モバイルルーター
　など

第 4 章

資　料

実践を通して、対面による指導とオンラインを活用した指導、それぞれの良さをまとめ、障害種別のオンラインを活用した効果的な指導事例について、一覧として整理することができました。

しかし、まだ指導事例数が十分とは言えないことや、県内外への般化、及び環境の整備が必要だと認識しています。

今後も、実践報告会のオンデマンド配信や、『遠隔による自立活動の指導　スタートガイド』等の配付により、調査研究の成果の普及を図るとともに、ICTをツールとしてつながる仕組みである「学びのネットワーク」の構築と活用を推進していきます。

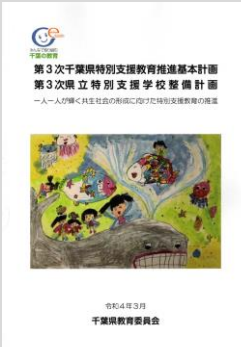
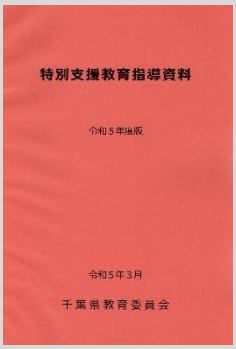
本スタートガイドや、この章に掲載した関係資料等を参考にし、ICTを活用した自立活動の指導に積極的に取り組んでいただきたいと思います。

そして、効果的であった指導について共有し、障害のある幼児児童生徒の継続した学びの保障を図り、教育の質の向上を目指していきましょう。

「効果的な指導のヒントは、現場（実践）にあり！」です。

（1）資料のご案内

県教育委員会特別支援教育課が作成・配付した資料です。ご活用ください。

実践報告パンフレット （ICT を活用した自立活動の効果的な指導に関するパンフレット） 令和4年3月発行	自立活動動画活用の手引 （チーてれスタディーネットに配信中の動画の活用に関する手引） 令和4年3月発行	学びの困難さに対する指導の手立て集 （教科別に、指導の手立てを具体的に紹介した事例集） 令和4年3月発行
		
第3次千葉県特別支援教育推進基本計画 （令和4年度から令和 13 年度までの 10 年間を見据えた計画） 令和4年3月策定	自立活動動画活用の手引 Version2 （チーてれスタディーネットに追加配信した動画の活用に関する手引） 令和5年1月発行	特別支援教育指導資料 （特別支援教育推進のための手引書） 令和5年3月発行

（2）通知・文献

〇確認していきたい通知・文献を紹介します。
〇法令の改正や資料の更新等、新しい情報の収集に努めましょう。
〇実践の裏づけや説明の際の根拠資料等のために、法令等を「身近なもの」にしていくことが大切です。

＜文部科学省＞

「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）」（平成 30 年 3 月）
「障害のある子供の教育支援の手引　～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～」（令和 3 年 6 月）
「医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律」（令和 3 年 6 月）
「個別の教育支援計画の参考様式について」（令和 3 年 6 月）
「遠隔教育システム活用ガイドブック第3版」（令和 3 年 3 月）
「初めて通級による指導を担当する教師のためのガイド」（令和 2 年 3 月）
「障害に応じた通級による指導の手引―解説と Q&A」（平成 30 年 改訂第 3 版）

（3） 実践報告会資料

ＩＣＴを活用した自立活動の効果的な指導の在り方の調査研究

令和３年・4年度文部科学省委託事業 成果報告

「遠隔による自立活動の指導」を考えている皆様へ

遠隔による自立活動の効果的な指導を目指して

令和５年１月24日(火)

千葉県教育委員会　特別支援教育課

調査研究の目的及び目標

目的

①実践をとおして、障害種別に、遠隔による自立活動の効果的な指導の在り方について明らかにする。

②ICTを活用して保護者や関係機関と連携し、「学びのネットワーク」を構築・活用して、「個に応じた指導・支援の充実」並びに、「教師の指導力の向上」を図る。

目標

①ICTを活用した遠隔による自立活動の指導に取り組み、障害のある児童生徒の学びの質の向上を高めるとともに、教師の指導力の向上を図る。

②ICTを活用し、自立活動や通級による指導について校内で共通理解を図るとともに、通常の学級など日常生活での般化に努め、小・中学校における自立活動についての理解啓発及び指導・支援の充実を図る。

③ICTを活用したネットワークを構築し、多面的・多角的な実態把握や評価、及び授業の工夫・改善に生かすことにより、より個に応じた指導・支援の充実を図る。

④実践報告会の実施及びオンデマンド配信や、「遠隔による自立活動の指導スタートガイド」の作成・配付等により、調査研究の成果の普及を図る。

調査研究の実施体制等

実施体制

1 指定校
- 学校種　小学校５校、中学校２校 計７校
- 障害種　６つの障害種（視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、言語障害、自閉症・情緒障害、発達障害）
- 指導形態 通級による指導、巡回による指導、特別支援学級、通常の学級

2 企画会議
- 研究推進会議
  - ・専門的知見から指定校への指導・助言を行い、本事業の円滑な実施に資する。
  - ・構成員18名 ⇒ 年３回の会議への出席と、指定校のオンライン公開研究授業の参観
- 研究指定校連絡会
  - ・進捗状況、課題、改善策等の情報交換を行い、PDCAサイクルで調査研究を進める。
  - ・構成員28名 ⇒ 年４回の会議への出席と、授業実践及びその記録と報告

取組内容

① 遠隔でのやりとりを含めた、実態把握の在り方
② 遠隔による評価の在り方
③ 遠隔による自立活動の指導の在り方
④ 遠隔でのやりとりを含めた、外部の専門家や在籍学級担任等との連携の在り方

令和４年度の取組の方向性

令和３年度
- 感染症対策や地理的な条件等により対面による指導が難しい場合の**学びの保障**
  - ・休業中や分散登校中も「学びを止めない」
  - ・長期休業中の家庭学習支援

↓

つないでみる・ためしてみる・効果を探ってみる

令和４年度
- **オンラインならではの効果的な指導**の在り方
  - ・オンラインを活用した指導が、当たり前の選択肢の一つとなる
  - ・オンラインを活用した指導の短所をカバーし、長所を最大限に発揮する指導
  - ・対面による指導とオンラインを活用した指導の、どちらの良さも適切に組み合わせて生かしていくハイブリッド型の指導

↓

つないだ効果をまとめる

表１　「遠隔による自立活動の効果的な指導」の実現に向けて

授業のデザイン

●**オンラインの良さを生かした授業をデザインする。**

①電子版「自立活動目標設定シート」を作成し、自立活動の目標を設定する。シートを作成する際は、「学びのネットワーク」を活用し、多面的・多角的な視点から検討しながら行う。

②対面による指導とオンラインを活用した指導、どちらの良さも適切に組み合わせて生かしていくハイブリッド型の指導を計画する。

③学習指導案に、「オンラインを活用した指導のねらい」や、「ICT活用上の留意点」を具体的に記載し、学習評価や、指導の効果の考察につなげる。

④自立活動の指導の効果を通常の学級においても波及することを目指す。

＋

環境のデザイン

●**オンラインの良さを生かした学習環境をデザインする。**

【児童生徒】
①Web会議システムの使い方や情報端末操作のためのスキルの習得
②家庭での学習環境づくり（保護者）

【教師】
①「学びのネットワーク」の構築と活用計画の作成
・家庭や相手先への説明と協力依頼
②通信環境の確認とツールの準備
・自校、家庭、相手先等
・事前接続テストの実施
③ICT活用スキルの向上と、児童生徒のICTスキルの実態把握及びその習得への指導
④トラブルの想定とその対応等のマニュアル作成
⑤市町村教育委員会への連絡やICT支援員等との連携
⑥オンライン公開授業の準備と実施
・在籍校、在籍学級担任、外部の専門家等

＝

自立につながる、学びやすい環境

➡

「遠隔による自立活動の効果的な指導」の実現

授業のデザイン　①

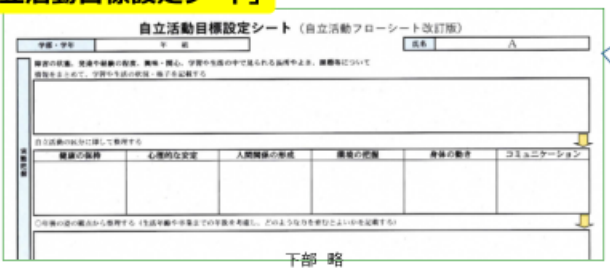
① 自立活動目標設定シート(図１）を作成し、自立活動の目標を設定する。シートを作成する際は、「学びのネッ トワーク」(図２）を活用し、多面的・多角的な視点から検討しながら行う。

具体的には

● **必要な情報を把握し、指導すべき課題を導きだす過程を大切にするため、保護者を含め様々な方とつながり、シートを作成する。**

(例)
・「選定した項目を関連付け、具体的な指導内容を設定する」部分で、外部の専門家とシートを資料共有し、意見を聞く。

図１　「自立活動目標設定シート」



➢ 図１は、千葉県総合教育センターが、学習指導要領の「流れ図」を参考に作成した電子版のシートで、「個別の指導計画」等、複数のシート間がリンクされている。

図２「学びのネットワーク」

ICTをツールとして
つながる仕組み

- 研究指定校が、医療、福祉等、外部の専門家や特別支援学校及び、在籍校（他校通級）と連携する等、学校内外の関係者がネットワークを組み、児童生徒の指導・支援の充実を目的とした仕組み
- 家庭（保護者）もネットワークの一員

授業のデザイン　②

② 対面による指導とオンラインを活用した指導の、どちらの良さも適切に組み合わせて生かしていく、ハイブリッド型の指導を計画する。

具体的には

- **児童生徒の興味・関心の高い教材で、必然性のある学習の場を設定する。**
- **指導内容の工夫と、役割を明確にした学習活動の充実を目指す。**

（例）
- 書いたり、作ったりする活動が多くなる場合は、児童生徒の手元がよく見え、支援しやすい対面による指導を中心に行う。
- 話したり、聞いたりする活動が多くなる場合は、Ｗｅｂ会議システムを活用して集中して表現しやすいオンラインを活用した指導を中心に行う。
- 伝えたい内容や知りたい内容を思考する活動が多くなる場合は、じっくり考える時間を確保しやすい対面による指導を中心に行う。
- 校外学習において、手触りやにおい等の情報から目標に迫る場合は対面による指導で行い、音声や画像等の情報から目標に迫る場合は、オンラインを活用した指導で行う。
- ことばの指導においては、発音の初期段階の指導は、正確な聞き取りと児童の反応に応じた柔軟な指導がしやすい対面による指導を中心に行い、発音定着のための指導は、長期休業中でも学習の機会を増やしやすいオンラインを活用した指導を中心に行う。

授業のデザイン ③

③ 学習指導案(図3) に、オンラインを活用した指導のねらいや、ICT活用上の留意点を具体的に記載し、学習評価や、指導の効果の考察につなげる。

具体的には

- **指導の効果を考察するための一観点として、「オンラインを活用した指導のねらい」を設定し、授業後に評価する。**

(例)
- 評価しやすいように、オンラインを活用した指導のねらいを明確にする。
- 教師間の協力のもとに、複数で評価する。
- 外部の専門家や、保護者にも評価してもらう。

- **児童生徒の予想される反応をていねいに想定し、対応方法を準備する。**

(例)
- 児童生徒のつぶやきや表情などが対面による指導と比べて十分読み取れない場合があることを想定し、理解度の確認をきめ細かく行う。
- 主体的な活動にするために、児童生徒の役割分担を明確にして伝えておく。(特に合同学習の場合)

- **ICTを効果的に活用するために、活用上の留意点を記載する。**

(例)
- 聞かせ方、見せ方の観点から、工夫点や留意点を記載する。(情報量、画面の文字の大きさ、色彩等)
- 学習の振り返りで、ICTを活用する場合は、学習の姿勢・意欲・学び方等の視点からも振り返るようにする。

図3 自立活動学習指導案様式 本時の指導について

(略)

6 本時の指導(○/○○時間)

(1) 目標

(2) オンラインを活用した指導のねらい

(3) 展開

時配等	主な学習内容と活動	・指導、支援 ◇個別の支援・合理的配慮 ★ICT活用上の留意点 ◎評価(方法)	教材教具・資料 (ICT機器)
導入			
展開			
まとめ			

言語障害　学習指導案　本時の指導について（3）展開

時配等	主な学習内容と活動	ICT活用上の留意点等
導入 （5分）	・日常会話をする。 ・口の体操をする。	・学習の初めに、タブレット型端末にウェブカメラを装着し、画面の見やすさと、スピーカーの聞き取りやすさを確認する。 ・本時の流れを書いたホワイトボードを提示し、見通しをもって学習できるようにする。 ・A児の興味・関心のある話題をカードにして提示し、自由に会話をしながら、本児の学習意欲を高めるようにする。 ・ウェブカメラの位置を調整し、児童の口元がよく見え正しく評価できるようにする。
展開 （35分）	・学習課題をつかむ ザ音を正しく発音しよう ・単音や無意味音節の中で正しく発音する。 ・単語や短文の練習をする。	・タブレット型端末の発表者モードを使用し、単音や無意味音の練習を興味をもって取り組めるようにする。 ・オンラインの音声をイヤホンを使い、より鮮明に聞き取り、適切に評価できるようにする。 ・回数を視覚化したカードを活用し、単語を同じ回数で繰り返すことで練習のリズムを整える。 ・見て分かるように文字カードや絵カードを利用しながら進める。
まとめ （5分）	・学習の振り返りをする。	・本時の流れを書いたホワイトボードを提示し、活動を思い出しながら振り返る ことができるようにする。

授業のデザイン　④

④ 自立活動の指導の効果が、通常の学級においても波及することを目指す。

具体的には

- **多様な学びの場において、児童生徒の困難さに寄り添いながら、自立的な学びを支援する。**

（例）
- 遠隔による日常的な打合せや情報共有を行い、児童生徒のニーズをタイムリーに把握し、指導に生かす。
- 次のような内容を意識して連携する。
  ①通級による指導で身に付けたどのような力が、教科等の授業でどのように生きるか。
  ②通級による指導で身に付けた力を、教科等の授業でどのように生かすことができるか。どのように生きたか。

- **PDCAサイクルで、「波及すること」を繰り返し、継続する。**

（例）
- 困難さのある教科の学習から開始し、他教科へと広げる。
- 特別支援教育コーディネーターを中心に、全校体制で広げる。
- 通級による指導と、通常の学級での授業の相互授業参観を行う。

環境のデザイン 【児童側】 ①②

① Web会議システムの使い方や、情報端末操作のためのスキルの習得
② 家庭での学習環境づくり（保護者）

具体的には

- **GIGAスクール構想で整備された、一人一台タブレット型端末の操作方法を身に付ける。**

(例)
- 学校のマニュアルを理解して、正しく使用する。
- タブレット型端末を使用することで、困難さが生じたときは、すぐに担任に相談する。

- **保護者と一緒に、家庭の中で外部からの雑音が入りにくく集中しやすいスペースの確保と、机・いすの準備をする。**

(例)
- 家庭でのオンライン学習が難しい場合は、担任に相談する。（通信環境が整っていない場合等）

環境のデザイン 【教師側】 ①②

① 「学びのネットワーク」の構築と活用計画の作成
② 通信環境の確認とツールの準備

具体的には

- **校内委員会等で、対象児童生徒の「学びのネットワーク」の対象機関や委員を決め、管理職が相手（接続）先等に協力依頼を行う。**

(例)
- 学びのネットワークづくりは、できるところから進め、徐々に対象機関や委員を増やしていくようにする。
- 対象児童生徒と、その保護者に対して、映像をネット経由で送信することを説明し、承諾を得る。
- 特別支援学校のセンター的機能などによる地域の特別支援学校や保幼・小・中・高等学校等との連携は、多目的に活用できるため、積極的に推進する。
  管理職が相手（接続）先の所属長等に対し、取組の説明を行い、協力をお願いする。

- **目的によって適切な相手（接続）先は異なるので、活用計画を立てる。**

(例)
- 専門性の高い講師の指導を直接受けたい、多様な考えに触れたい等、目的に応じて相手（接続）先を決めていく。

- **自校と、相手（接続）先の通信環境を確認し、調整する。**

(例)
- 他市町村や県立の学校等と接続する場合は、市町村教育委員会や県教育委員会に相談するとよい。
- 接続テストを実施する。

環境のデザイン 【教師側】 ③④

③　ＩＣＴ活用スキルの向上と、児童生徒のＩＣＴスキルの実態把握及びその習得への指導
④　トラブルの想定とその対応等のマニュアル作成

具体的には

- **児童生徒一人一人の障害の状態等に応じた支援機器の整備が行われる必要があることを認識し、積極的に研修したり、市町村のICT支援員に 助言を受けたりして、活用スキルの向上を図る。**

(例)
- 開始時点で最低限知っておきたい機能→サインイン・録画方法・画面共有・強制ミュート・チャット・リアクションボタン

- **児童生徒の学習前のICTへの興味・関心度合やスキルのレベルを把握し、オンラインを活用した学習に必要なスキルの習得に努める。**

(例)
- 開始時点で最低限知っておきたい機能→サインイン・画面共有・ミュート・チャット・リアクションボタン
- 教科学習においても習得の機会は多いので、タイムリーに実態を把握する。
- 学習活動のやりとりの中で必要感をもって習得できるようにする。
- 知らない操作はできないので、授業のデザインをもとに、必要なスキルを洗い出しておく。
- スキルの習得には順次性が必要である。慣れてきたら、画面のピン止め等の操作方法も伝える。

- **ネットワークが不安定になるなどして、回線が切断されたり、映像や音声に乱れや遅延が発生したりする場合がある。授業がストップしてしまわないように、簡易指導案を共有し、万が一トラブルが起きた際にどうするか、双方で確認しておく。**

環境のデザイン 【教師側】 ⑤⑥

⑤　市町村教育委員会への連絡やICT支援員等との連携
⑥　オンライン公開授業の準備と実施

具体的には

- **他校通級の在籍校とつないで行う際は、児童生徒側に同席し支援する人的協力を得ておく。**

(例)
- 市ICT支援員が同席して、児童生徒の集中が途切れないようにトラブル対応をする。

- **外部の専門家等から指導・助言を得るために、オンライン公開授業を実施する。**

(例)
- 何をポイントに参観するかによって、画面を調整できるので、担当教師のニーズに応じた指導を得ることができる。
- 参観者が、音声を正確に聞き取れるような機器や、アングルの吟味等、ていねいに準備をして行う。
- オンライン公開授業は、児童生徒にとっても落ち着いて授業に取り組むことができる。

実践から見る「対面による指導」の良さ

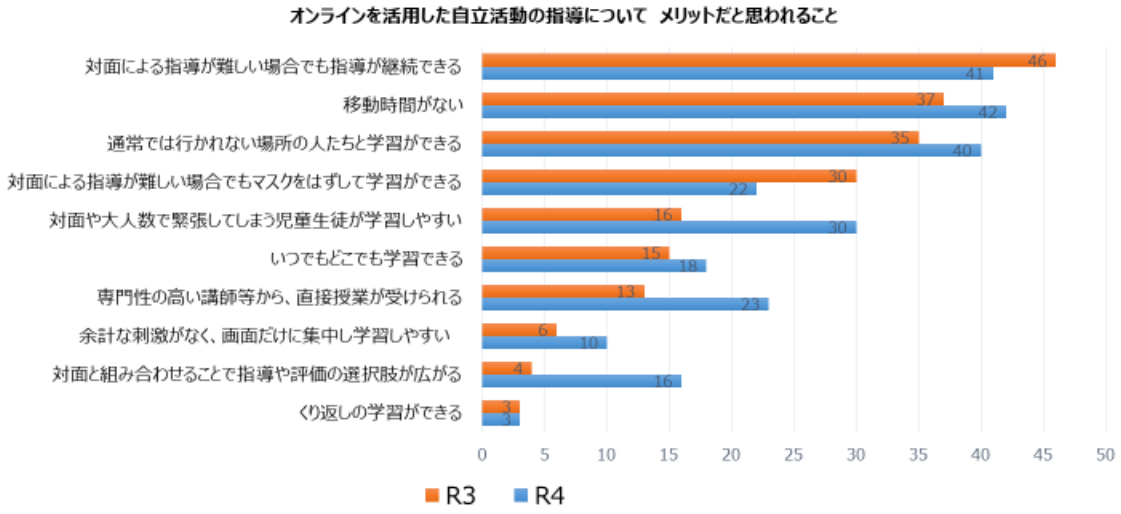
学習者（児童生徒）	指導者（担当教師）
情報量等に関係することについて ①指導者の画面越しの音声等からだけでなく、非言語コミュニケーションといわれている表情や姿勢等から多くの情報を得やすいことから、説明や指示を正しく理解することに役立てることができる。 ②実物から手触りやにおい等の情報を得て目標に迫る学習を行う場合は、五感をとおして気付きが生まれ、理解を深めることができる。 **学習意欲の維持等について** ③人とのつながりや空間の同時共有性を感じやすいことから、学習に対する集中力が高まる。 ④表現方法が多少未熟であっても、指導者が近くにいるので、十分な時間をとる等の理解が得られやすいことから、安心して表現活動等ができる。 ⑤称賛や励ましの言葉を随時近くで聞くことができるので、学習への意欲を維持しやすい。 **学習内容等について** ⑥直接身体等に触れたり動かしたりしながら目標に迫る学習を行う場合は、実感をとおして気付きや確認等ができる。 **学習中の指導・支援について** ⑦学習中の理解度(形成的評価）に応じて、柔軟に指導方法の変更が可能になることから、無理なく楽しく学習に取り組むことができる。 ⑧演習や作業等の学習で困ったことがあった場合、指導者が近くにいるので、画面越しの音声等からだけでなく、動作を伴った支援が受けやすくなり、安全かつスムーズに学習を進めることができる。	**情報量等に関係することについて** ●多様な学習場面を想定した障害による学習上又は生活上の困難を、観察や対話等からきめ細かく把握することができる。 ①について ・学習者に対して、非言語コミュニケーションといわれている表情や姿勢等を効果的に使って、指導・支援することができる。 **学習意欲の維持等について** ③④⑤について ・人とのつながりや空間の同時共有性を感じやすいことから、ラポールの構築に効果的である。 ・児童生徒の表情やつぶやき等から理解度や意欲をタイムリーに把握できることにより、称賛や励ましの言葉をかけたり注意を促したりしながら、効率よく指導することができる。 **指導内容等について** ⑥について ・直接身体等に触れたり動かしたりしながら目標に迫る指導を、スムーズに行うことができる。 **学習中の指導・支援について** ⑦について ・児童生徒の反応に応じて柔軟に指導方法の変更がしやすいことから、指導と評価の一体化を図ることができる。 ⑧について ・演習や作業等の学習でつまずきが発見しやすいことと同時に、手を添える等の支援がしやすくなる。

実践から見る「オンラインを活用した指導の良さ」

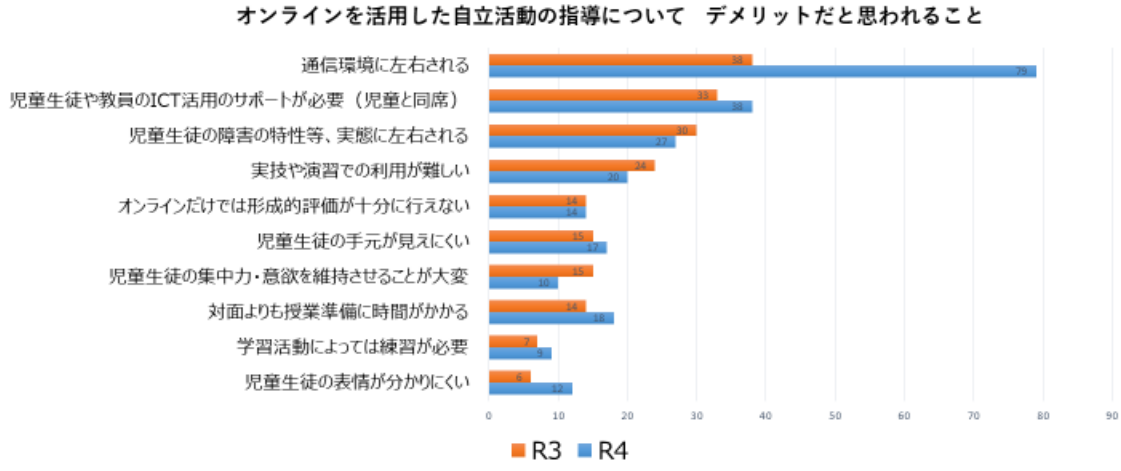
学習者（児童生徒）	指導者（担当教師）
移動時間と空間に関係することについて ①落ち着いた場所・慣れた場所で学習することが可能となり、意欲的に学習に取り組むことができる。 ②学習の回数を増やすことや、長期休業中でも学習すること等、継続して学習に取り組むことができる。 ③通常では訪問が難しい場所の人とも学習することが可能となり、意欲的に学習に取り組むことができる。 ④通常では訪問が難しい場所の専門性の高い講師等から、直接指導を受けることができる。 **学習内容等について** ⑤障害の状態や特性が似ている者同士で学習を行う場合、校内に対象相手の児童生徒が在籍していない場合であっても可能となり、同じ障害のある友人と苦痛や悩みを分かち合うことや、多様な考えに触れること等ができる。 ⑥広範囲から人材の活用を図ることが可能となり、同じ障害のある大人のロールモデルに触れるなどして、障害の受容や自己肯定感を育てることができる。 **Web会議システム機能等の活用について** ⑦画面をとおしてのやりとりが、刺激を統制した落ち着いた学習環境となり、情緒が安定し、学習に集中することができる。緊張が和らぎ、他者とのコミュニケーションをとることができる。 ⑧画面の中の相手を意識し、相手に伝えること・相手の話を聞くことに集中することができる。また、見るものに焦点をあてることができる。 ⑨自分なりの表現方法の一つとしてチャット機能がツールの選択肢となり、自信をもって他者と会話することができる。 ⑩ミュート機能の活用で会話の間を実感したり、リアクション機能で心情の表現をしたりできる。 ⑪カメラ等機器の配置により多角的な視点が可能になることにより、動き等をモニターしながら的確な自己評価をすることができる。	**移動時間と空間に関係することについて** ①②③について ・障害の状態や特性に応じて、指導場所や時間・回数を柔軟に選択・決定することにより、指導の効果を高めることができる。 ④について ・担当教師が、専門性の高い講師と協働する授業を行うことにより、授業改善に生かす等、指導力の向上を図ることができる。 **指導内容等について** ⑤⑥について ・少人数（ペア学習等）での学習を計画し、指導の充実を図ることができる。 **Web会議システム機能等の活用について** ⑦⑧⑨⑩について ・障害の状態や特性に応じて、Web会議システム機能を活用することにより、心理的な安定が図られ、指導の効果を高めることができる。 ・情報量の調整をし、見てほしいものに、焦点があてられる。 ・意思伝達方法の一つとしてチャット機能を活用することにより、児童生徒とのやりとりを充実させることができる。 ⑪について ・公開研究授業の参観ポイントに応じて、カメラ等機器の配置を工夫し多角的な視点が可能になることにより、担当教師のニーズに応じた指導・助言を得ることができる。

アンケートから見る「オンラインを活用した指導のメリット」

令和３年度末と令和４年度末に、研究指定校や協力校の教職員や市教育委員会の指導主事等、４４名の皆さんにアンケート調査を行いました。　（優先順に３つ選択・数字はポイント　1位：３Ｐ　２位：２Ｐ　3位：１Ｐ）



アンケートから見る「オンラインを活用した指導のデメリット」



アンケートから見る「在籍学級担任等から見た連携」

令和４年度末に、対象児童生徒の在籍学級担任等にアンケート調査を行いました。

Q：通常の学級での指導に、特別支援学級・通級による指導の担当教師との連携は、有効でしたか。

A：大変有効であった・有効であった → 100%

在籍学級担任等の声

- 通常の学級での指導だけでは、気がつかないことや知らないことを、事前に知り、考え、児童生徒の反応を想定した上で指導・支援することができた。
- 児童生徒の気持ちに寄り添いながら、その可能性を引き出す関わり方を共に考え、指導に生かすことができた。
- 通級による指導の内容について情報共有をしていたので、意識的に本人・保護者へ同じ観点で声かけ等、発信することができ、児童生徒の自信向上の一助になっていると感じた。
- オンラインを活用した指導を参観した後に、そのままオンラインで定期ミーティングを行った。活動内容はもちろんだが少しの変化についても情報共有することができ、双方の指導・支援に生かすことができた。

アンケートから見る「教師の指導力の向上」

令和４年度末に、研究指定校の担当教師・管理職や市教育委員会の担当指導主事等にアンケート調査を行いました。

Q: 本調査研究に取組むことで、自立活動の理解が深まり、指導力が向上したと思いますか

A： 大変向上した・向上した → 100%

担当教師の声

- オンラインを活用した指導のために分かりやすい教材や教具の作成をしたことや、画面の見せ方の工夫をしたことなどが、対面での指導の充実にもつながった。
- 外部の専門家から助言を得て、優先順位をつけて指導することの大切さを再認識することができた。

管理職の声

- 特別支援教育コーディネーターが中心となってWeb会議システムやグループウェアを活用して支援に関する必要な情報を提供したことにより、校内の他の教師も指導・支援の在り方について理解を深めることができた。
- 自立活動の指導のねらいを達成する上で、指導の選択肢が増え、アプローチの幅が拡がった。
- 人的ネットワークに広がりが見られ、専門性の向上に寄与している。
- 校内の教職員の理解が進み、より連携が深まっている。

市教育委員会担当指導主事の声

- オンラインを活用した指導の特性だけでなく、自立活動の指導そのものへの理解が深まった。

取組内容①　遠隔でのやりとりを含めた、実態把握の在り方

成果

- 電子版「自立活動目標設定シート」を関係者で共有するなどして作成・活用し、 児童生徒の障害による学習上又は生活上の困難を多面的・多角的な視点で把握した上で、適切にオンラインを活用した指導を行うことにより、児童生徒は成功体験を積み上げる中で、自己肯定感をもち、自立的な学びに向かうことができるという見通しをもつことができた。

取組内容②　遠隔による評価の在り方

成果

- 音声や映像などのデジタルでの学習記録は、取組や前時の学びを想起しやすくなり、自己の学習の変化や成長を可視化することにより、学習意欲が高まるとともに、自己理解を深めることができた。また、指導の改善にも結び付けることができた。

- Web会議システムを活用して、リアルタイムに自分の身体の動きや口・舌の動きをモニターすることができる環境をデザインすることにより、自己評価の機会を適切に設定することができた。

- オンラインを活用して公開研究授業を行う場合、参観ポイントに応じてカメラ等機器の配置を工夫することにより、多角的な視点での参観が可能となり、担当教師が、外部の専門家からニーズに応じた指導・助言を得て、授業の改善に生かすことができた。

成果　取組内容③　自立活動の遠隔による指導の在り方

□児童生徒との信頼関係の構築を土台として、関係者がICTをツールとして連携し、「授業のデザイン」と「環境のデザイン」という視点をもって、自立につながる学びやすい環境をつくることにより、「遠隔による自立活動の効果的指導」の実現への見通しをもつことができた。

□児童生徒が学習の主体となるような、自立的な学びを支援するために、対面と同様に、信頼関係の構築を意識して指導を行った。学習が継続できるように意識づけ、心理的に安定するように支援することが大切であることから、非言語コミュニケーションと言われている教師の「表情」「姿勢」「態度」にも気を配ることに努めた。

□対面による指導とオンラインを活用した指導の、どちらの良さも適切に組み合わせて生かしていく、ハイブリッド型の指導を計画した上で、学習指導案に、「オンラインを活用した指導のねらい」や、「ICT活用上の留意点」を具体的に記載することにより、指導の効果の考察や検証につなげることができるという見通しがもてた。

□実践をとおして、対面による指導とオンラインを活用した指導の良さ、及び障害種別の効果的な指導についてまとめることができた。今後もメリット・デメリットを意識し、活用の幅を広げていくようにする。

取組内容④　遠隔でのやりとりを含めた、外部の専門家や在籍学級担任等との連携

成果

□ICTを活用した「遠隔による連携」は、移動時間や空間の制限をこえて、多くの関係者とつながる可能性が広がり、多面的・多角的な視点からの実態把握や評価、授業改善、通級による指導の効果の波及等に生かすことができた。

➢実態把握や評価、ケース会議、日常の情報交換等、目的を明確にして活用した。
➢通級による指導の担当教師と、在籍校・在籍学級担任が放課後に情報交換を行う等、直接的連携を取りやすい仕組みづくりに効果的であった。例）定期ミーティング等
➢オンライン研究授業において、遠方の外部の専門家の指導・助言を得ることができた。
➢通級による指導の効果が、在籍校での多様な学びの場においても波及することを目指すことができた。

□市町村教育委員会等がコーディネートして、「学びのネットワーク」を構築することにより、日常的に特別支援学校のセンター的機能を活用したり、高等学校と連携したりすることが容易となり、専門性の高い担当教師から児童生徒が直接指導を受ける機会が増えた。担当教師が人事異動等で替わっても持続可能なネットワークとなる。

成果の普及に関する主な内容

■令和３年度

①「実践報告パンフレット」の作成・配付

②「自立活動動画Version１」14本の配信

③「自立活動動画活用の手引」の作成・配付

■令和４年度

①「自立活動動画Version2」10本の配信

②「自立活動動画活用の手引2」の作成・配付

③実践報告会の開催(1/24) と、オンデマンド配信

県報告に加え、研究指定校７校の担当教師も自校の取組の成果と課題を報告した。

市教育委員会の担当指導主事等も参加し、情報共有を図ることができた。

④「遠隔による自立活動の指導スタートガイド」の作成・配付

これから、「遠隔による自立活動の指導」を始めてみたい、もっと可能性を探ってみたいなどと思っている多くの先生方に読んでいただけるよう、指導をスタートするための視点や手順をQ＆A形式で掲載したり、研究指定校の実践を紹介したりする構成で作成する。

今後の取組に向けて(課題)

□「遠隔による自立活動の効果的な指導」の実現に向けては、対面による指導と同様、対象児童生徒の学びの過程において考えられる困難さなど、具体的な実態把握と目標の設定が出発点であると認識し、「授業のデザイン」と「環境のデザイン」「信頼関係の構築」の視点をもち、実践を蓄積していく。

□「環境のデザイン」に関わることとして、通信環境の整備と同様に、「児童生徒や教員のICT活用のサポートが必要である。特に他校通級の場合において、児童に同席する大人が必要である。」との声が多く聞かれた。 自立につながる学びやすい環境づくりのために、人的な支援体制を検討・整備していく必要がある。

□移動時間と空間の制限をこえて、学校種を問わず、遠方の児童生徒とオンラインを活用して行ったペア学習や交流学習が効果的であったとの報告が多く聞かれた。本調査研究で連携することができた接続先とは、維持・強化を図るとともに、気軽に交流学習等が可能となるよう、新たな接続先の開発を目指し、「学びのネットワーク」の構築と活用を推進していく。

（4）企画会議等委員

調査研究の円滑な実施に資するため、研究推進会議と、研究指定校連絡会を設置しました。

① 研究推進会議

課題を共有し、遠隔による指導の在り方について協議する。専門的な知見から研究指定校への指導・助言を行うこととし、令和3年度16名、令和4年度 18 名で組織しました。

令和3年度 研究推進会議委員

※ 所属 職 等は、令和3年度時で記載。 （敬称略）

NO	所属 職 等	氏 名
1	放送大学 教授	角田 哲哉
2	インクルーシブ教育システム推進センター 主任研究員 （独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）	小西 孝政
3	千葉県特別支援学級・通級指導教室設置校校長会 会長 （館山市立北条小学校長）	安藤 深佳子
4	千葉県特別支援学校校長会 会長 （千葉県立桜が丘特別支援学校長）	西山 博
5	千葉県特別支援教育研究連盟専門部視覚障害部 会長 （千葉県立千葉盲学校長）	竹内 登志子
6	千葉県特別支援教育研究連盟専門部聴覚障害部 会長 （佐倉市立井野小学校長）	大橋 昭彦
7	千葉県特別支援教育研究連盟専門部言語障害部 会長 （大網白里市立増穂北小学校長）	髙橋 和雄
8	千葉県特別支援教育研究連盟専門部発達障害部 会長 （習志野市立東習志野小学校長）	藤本 真由美
9	千葉県特別支援教育研究連盟専門部肢体不自由部 会長 （千葉県立松戸特別支援学校長）	原口 明雄
＜事務局＞		
10	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課 研究アドバイザー	佐瀬 史恵
11	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 主幹兼教育支援室長	根本 敦
12	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 主席指導主事	金田 幸夫
13	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 指導主事	髙梨 美佐子
14	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 指導主事	鈴木 照子
15	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 指導主事	加藤 由美子
16	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 指導主事	島岡 奈緒美

令和4年度　研究推進会議委員

（敬称略）

NO	所属　職　等	氏　名
1	放送大学　教授	角田　哲哉
2	発達障害教育推進センター 研究員 （独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）	五島　脩
3	千葉県特別支援学級・通級指導教室設置校校長会 会長 （館山市立北条小学校長）	安藤　深佳子
4	千葉県特別支援学校校長会 会長 千葉県特別支援教育研究連盟専門部視覚障害部 会長 （千葉県立千葉盲学校長）	青木　隆一
5	千葉県特別支援教育研究連盟専門部聴覚障害部 会長 （佐倉市立井野小学校長）	宮本　正教
6	千葉県特別支援教育研究連盟専門部言語障害部 会長 （大網白里市立増穂北小学校長）	髙橋　和雄
7	千葉県特別支援教育研究連盟専門部発達障害部 会長 （習志野市立東習志野小学校長）	藤本　真由美
8	千葉県特別支援教育研究連盟専門部肢体不自由部 会長 （千葉県立船橋特別支援学校長）	土田　崇一郎
9	千葉県特別支援教育研究連盟専門部自閉症・情緒障害部 会長 （浦安市立明海中学校長）	山本　典子
１０	千葉県総合教育センター特別支援教育部 部長	山﨑　博志
１１	千葉県発達障害者支援センター 所長	舘山　聡
＜事務局＞		
１２	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課 研究アドバイザー	佐瀬　史恵
１３	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 主幹兼教育支援室長	齋藤　勝史
１４	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 指導主事	髙梨　美佐子
１５	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 指導主事	宮坂　拓也
１６	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 指導主事	加藤　由美子
１７	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 指導主事	荒井　伸太郎
１８	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 指導主事	島岡　奈緒美

※　複数の学校種、多様な障害種と学びの場での指導に対応するため、2名を2年目から依頼しました。

② 研究指定校連絡会

進捗状況や取組上の課題、改善策等の情報交換を行い、PDCAサイクルで調査研究を進めることとし、令和3年度23名、令和4年度28名で組織しました。

令和3年度 研究指定校連絡会

※ 所属 職 等は、令和3年度時で記載（敬称略）

NO	所属 職 等	氏 名
1	船橋市立三咲小学校 教諭	宮内 しのぶ
2	鎌ケ谷市立東部小学校 教諭	青木 葉月
3	佐倉市立佐倉小学校 教諭	安原 直子
4	東金市立正気小学校 教諭	三浦 晶子
5	館山市立船形小学校 教諭	源間 由佳
6	船橋市教育委員会 指導主事	鈴野 浩之
7	鎌ケ谷市教育委員会 副主幹(兼)指導主事	岡田 良昭
8	佐倉市教育委員会 指導主事	楠川 栄治
9	東金市教育委員会 主幹	永野 喜信
10	館山市教育委員会 指導主事	鈴木 美枝子
11	葛南教育事務所 指導主事	金子 勝一
12	東葛飾教育事務所 主席指導主事	高木 秀人
13	北総教育事務所 指導主事	古川 友行
14	東上総教育事務所 指導主事	長谷川 峰史
15	南房総教育事務所安房分室 指導主事	佐々木 操
16	千葉県総合教育センター 研究指導主事	山中 暢厳
＜事務局＞		
17	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課 研究アドバイザー	佐瀬 史恵
18	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 主幹兼教育支援室長	根本 敦
19	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 主席指導主事	金田 幸夫
20	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 指導主事	髙梨 美佐子
21	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 指導主事	鈴木 照子
22	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 指導主事	加藤 由美子
23	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 指導主事	島岡 奈緒美

令和3年度 研究協力校

（順不同）

NO	校 名
1	千葉県立船橋特別支援学校
2	千葉県立千葉聾学校
3	千葉県立安房特別支援学校
4	千葉県立袖ケ浦特別支援学校
5	佐倉市立寺崎小学校
6	佐倉市立内郷小学校
7	東金市立城西小学校

オンラインを活用した指導の相手校等として、ご協力いただきました。

令和4年度　研究指定校連絡会

（敬称略）

NO	所属　職　等	氏　名
1	船橋市立三咲小学校　教諭	宮内　しのぶ
2	鎌ケ谷市立東部小学校　教諭	青木　葉月
3	鎌ケ谷市立鎌ケ谷中学校　主幹教諭	野中　幹子
4	佐倉市立佐倉小学校　教諭	藤田　澄子
5	旭市立第一中学校　教諭	宮内　明美
6	東金市立正気小学校　教諭	三浦　晶子
7	館山市立船形小学校　教諭	源間　由佳
8	船橋市教育委員会　指導主事	鈴野　浩之
9	鎌ケ谷市教育委員会　副主幹(兼)指導主事	三星　みなみ
１０	佐倉市教育委員会　指導主事	楠川　栄治
１１	旭市教育委員会　指導主事	菅谷　勝人
１２	東金市教育委員会　主幹	大関　利明
１３	館山市教育委員会　指導主事	鈴木　美枝子
１４	葛南教育事務所　指導主事	平石　弘
１５	東葛飾教育事務所　指導主事	古江　大介
１６	北総教育事務所　主席指導主事	髙塚　啓子
１７	北総教育事務所海匝分室　指導主事	豊山　哲史
１８	東上総教育事務所　指導主事	長谷川　峰史
１９	南房総教育事務所安房分室　指導主事	星野　恵美子
２０	千葉県総合教育センター　研究指導主事	山中　暢厳
＜事務局＞		
２１	千葉県教育庁教育振興部学習指導課 ICT 教育推進室　指導主事	斉藤　光紀
２２	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課　研究アドバイザー	佐瀬　史恵
２３	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室 主幹兼教育支援室長	齋藤　勝史
２４	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室　指導主事	髙梨　美佐子
２５	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室　指導主事	宮坂　拓也
２６	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室　指導主事	加藤　由美子
２７	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室　指導主事	荒井　伸太郎
２８	千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課教育支援室　指導主事	島岡　奈緒美

※　小・中連携の在り方を探るため、中学校2校は、2年目から指定しました。

令和4年度　研究協力校

（順不同）

NO	校　名	NO	校　名
1	千葉県立船橋特別支援学校	2	千葉県立千葉聾学校
3	千葉県立安房特別支援学校	4	千葉県立袖ケ浦特別支援学校
5	館山市立房南中学校	6	東金市立鴇嶺小学校
7	香取市立佐原小学校	8	佐倉市立弥富小学校
9	佐倉市立内郷小学校	10	千葉県立旭農業高等学校
11	千葉科学大学付属高等学校		

千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課

〒260-8662　千葉市中央区市場町1－1

電　話　043-223-4050
ＦＡＸ　043-221-1158
令和5年3月